

阿伽井及阿伽井屋について

建造物研究室

はじめに

第22次平城宮跡発掘調査で覆屋のある井戸が発掘され、各方面に報道された。それと類似のものに園城寺（滋賀県大津市）金堂西側の阿伽井及びその覆屋があり、奈良では東大寺のものが、お水取り行事と共に頗る著名である。

仏教辞典によると「阿伽」とは「冲聖な水」という意味の仏教語であることが判る。

平城宮で検出のものを直ちに阿伽井及び阿伽井屋に結びつけて考えるのは適當でないとと思われるが、此處では古い寺院にある井戸と覆屋について少しく紹介してみよう。

二 阿伽井について

東大寺のお水取りは嚴寒若狭井から水を汲むことが行事の中心をなしている。現在この井水は神聖視のあまり阿伽井屋の内部構造は部外者には一切秘密にされているが、その構造については、東大寺要録諸院章第四、二月堂の項に（前略）今聞古入云、東忠和尚、被始三六時行法時、二月修中初夜之終讀神名帳、勸請諸神、由茲諸神、皆悉影嚮、或競與、福祐、或譯為三守護、而遂敷明神、恒慈、眞魚、精進是希ナリ、臨三行

法之末、晚以參会、聞其行法、隨喜感慶、堂邊可奉獻、關伽水之由所示告也、時有黑白二鶴、忽穿磐石、從地中出飛居榜樹、從其二迹、甘泉湧出香水充満、則置作石、為關伽井、其水澄映、世旱無涸、彼大明神在若狹國遠敷郡、國人崇敬、三大威勢、前有大川、川水砰礎、奔波涌流、由獻其水、河未渴盡、俄無流水、是故俗人号無音河云々、然則二月十二日夜、至後夜時、練行衆等下三集井邊、向彼明神，在所、加持井水、以加持力、故其水盈滿、干時汲取、入香水瓶、不令斷絕、自余相承蓬為故事、從天平勝宝之比、至三千今時、及四百歲、雖經數百年、其瓶內香水淨潔潔々、飲者除患、身心無惱、執猶如無熱池八功德水矣。

と書かれていて、その井戸が2ヶ所から湧出している出来と作石で囲んだ井戸側の構造とを明示している。

以上は東大寺要録諸院章第四、一、二月堂の項の抜萃であるが、この記録には阿伽井屋のことにはふれていない。

奈良に於ける阿伽井屋でもう一つ著名なのは秋篠寺の大元帥明王出現の井戸である。賴瑜の秘抄問答第十三によると、昔常曉師が秋篠寺の閑伽井に臨んだとき、水底に忿怒の形影が現じたのを見、奇特の思いをなしてその形を圖絵したが、渡海入唐のとき、その姿と同じの本尊を拝することができたという乗印阿闍梨の物語を載せている。

秋篠寺の阿伽井の由来も平安時代初期否それ以前に溯源することが知られるのである。現在の井戸は、一辺1m80角であるが、下方は木枠、その上に自然石を積みしついで、その上が切石の枠、更にその上をコンクリートで塗り固めている。深さは約1m、底には3cmぐらいいの砂利が一面に敷きつめられているのが澄みきった水を通して見える。その東背後にも別に小さな井戸があるが、これは庶民に水を汲まずための後世の設備である。

寛永9年の古図による

と、旧境内の西北方2町半に飛地(二町坪ほど)があり、それを「關伽井森」としている。現本堂の背

面には弁天池や園池の跡が二、三ある。一方南門外の八所御靈神社には靈水が湧き、金堂跡南前面にも井戸がある。これらを結ぶ二、三の水脈が交つたところが大元明王出現の阿伽井の位置なのであらう。

このような清泉の仏教

的信仰は大和國ばかりではない。山城國にも数々ある。中でも平安時代初期の開創とされている醍醐寺にそれがある。醍醐寺新要録上伽藍部准別院篇、草創事に

慶延記云、堂建立之由來、尊師者貞觀寺僧正^{真釋}入室弟子也(中略)矣以三朝之顯現、深思一門之建立、遙守嶺権方、自西坂、次第攀登、令執金剛神奉出之時、奉立之石邊、暫安息關伽井之許、有白髮老翁、搔除木葉、以左右手、救水飲云、阿波孔醍醐味哉、忽然失矣、爰知化人之飲水、尊師至水許、御覽之、水自地而高湧出為後見之、注置此石於水廻、又覽准附堂跡、為不可思議之勝地(下略)

である。この名水の味いを形容した仏教語の「醍醐味」からこの寺の名を得たものであり、醍醐の井泉の存在が、この寺の根本を形成したものであったことを意味しよう。

仏寺の草創と阿伽井との関係は古くは近江國園城寺にもある。

「寺門伝記補錄第六 御井来由付寺号」によると、

長等山東塙一区在焉、天智聖代、太政大臣皇子大友之宅地也、界闊地垣、形勢奇絕之處也、其間有水、名「御井」、水之為體也、不冽不穢、甘而且清、妙見^{ミツミ}八德、冬夏無增減、実是無雙靈水也、貞觀己卯年(元)智証大師始至于當山時、逢^ミ大友郡堵牟麻呂、大師問^{シテ}曰、當寺題曰園城、更名御井者何也、大友答曰、伽藍西砌有井、天智天武持統三皇降臨之時、把此井水以浴玉質^{ヒタチ}時俗因而名曰御井^{ミツミ}、鑑此處立伽藍俗復以水名寺、呼曰御井寺耳、大師聞之深以惑心、即復改御為^ミ三、而言是即取三皇浴井之義、亦是取^ミ此井水、以為三部灌頂之關伽^ミ遠至^ミ於慈

とある。（第一図）

阿伽井の構造を略述すると、湧泉の周辺は自然形の石を組んで、あたかも平安時代東三条殿の千貫泉や高陽院の作景のようにしており、その南西隅から今日でも音を立てて湧出している。ただ北外側から半分阿伽井屋へ入り込んだ石のあること、東正面から格子戸を通して覗くと3個の石が釣台よく立てられており、それに連注繩がはらされてい。る。むかし北及南の水際には板石風のもので開つてあり、これは立石とはうまく調和しそうにない。

以上の諸点から見て、昔からこのような覆屋であつたかどうか疑問視されるのである。このほか清泉の存在が著名社寺草創に直接間接影響を与えていたものは全国に夥しく、神祇の名となり、祭祀や伝教行事の称となり、神職僧侶の姓名又は土地の名称となつてゐるものが多く、日本人が如何に清泉を神聖視し、その宗教的利用に同心を寄せていたかが判らう。

三 阿伽井屋

以上は清泉即ち阿伽井についてのべたのであるが、ここではその覆屋である阿伽井屋について説明する。

まず東大寺阿伽井屋はいつごろでき、その作者は誰なのか。東大寺上院中過帳（二月堂）によると

（前略）

後白河天皇 食堂盤体施人珍慶法印

湯屋阿伽井屋作 寛秀大師練

別当勝賢前権僧正

とある。後白河法皇は建

久3年3月13日崩御、勝

賢僧正は建久7年6月22

日卒去であるから寛秀の

死はその間であり、従つ

て藤末鎌初にかけて練行

衆の一人であつた寛秀に

よつてはじめて阿伽井屋

が建てられたものとする

ことができそうである。

その様式構造は、桁行3間（中央1間は8尺、他は6尺9寸5分）、梁間2間（柱間6尺5寸）単層切妻造、木瓦葺である。四

周のうち南側の板扉の出入口を除き、あとは全部板壁^{〔註3〕}となつている。（第二図）

秋篠寺の阿伽井屋については、その造営年代や作者を詳らかにしがたいが、秋篠寺真言院縁起一巻奥書保延五乙未歲正月八日（江戸時代書写本）によると

（前略） 保延元年六月中 魔風頻扇兵火忽起而一山既成焦土稍得以

奉出於講堂之尊像且防助講堂二字故令達之於載聞使課於工匠以不日成再建香水閣及修補本堂焉然七堂不全復於旧制也嗟惜矣乎（下略）

とある。この記録は全面的に信ずるわけには行かないが、仁明天皇の

第2図 東大寺阿伽井屋

御宇（832-849）當時小栗柄常暁が太元明王の尊容を感じ得し、この阿伽井の名声を得る前後において、その香水上に覆屋をかけて、その汚損を防いだことが考えられる。

園城寺阿伽井に覆屋のできたのがいつの頃か不明であるが、泉辺の

石組の方が先行することは前にものべた通りである。現存のものは慶長内裡の車寄を移して復興したとも、或は金堂の建立された慶長4年（1599）頃にここで新築されたものとも伝えられる。

桁行3間、梁間2間、柱間は中央1間は6尺5寸他はすべて5尺、

単層、向唐破風桧皮葺である。角柱で、唐様の三斗を入れ、正面中央に簷股を見せている。正面は格子戸で外側から覗き見ることができるほか、他は3方板壁である。背面を除き、欄間に花狛間を入れている。

総て化粧屋根裏で北面の小壁には極彩色の雲紋楽器などの模様が美しい。

阿伽井屋とその周辺の立石群とを見くらべると、その石組は最初からここに湧泉の覆屋を想定してのものと考えられなくはないから、覆屋と共に周辺の石組はかなり変更があったとせざるを得ないようである。おそらく上古三帝のゆかりの聖泉として、その保存の意味から覆屋の出来たのは、相當早いのであろうが、桃山或は江戸時代初期の覆屋とは形状に於ても、規模に於ても少し違つたものであつたとみたいたい。

四

おわりに

はじめに断つておいたように、第22次調査検出の井戸と覆屋とは色々の点で異なるのであるが、湧出する地点が平城宮側の場合は水上池方面からの浅い渓谷地形に於ける地下水の一露頭であり、他が何れも丘

阿伽井及阿伽井屋について

陵麓の湧泉であること、井戸枠及び覆屋については清泉の保護のため木製又は作石による枠を以てし、入口を除いて他の3方は板壁で囲つてある点などは頗る類似しているのである。（森蘿・牛川喜幸）

註

（1） 東大寺の阿伽井及び阿伽井屋の内部のことが知りたく、寺の関係者に聞き合わせたところ、水は井戸の底から湧出するが東方よりも少量流入するものらしいこと、ただ昔から「井戸の水底が浅く、ズツク様の柄杓で汲むと少し砂がまじる」ということだけが判つた。

（2）

「寺門云記補疑御井米由付寺号」の一節
補日名三御井者、天子井池中略是故天子所居之處、必有御井

若々南都者系代宮城、仍即有數箇廻御井也

とあり天智天皇の山御井、光仁天皇の初貞御井、長田王子の山辺御井などをあげ更に延喜式神祇部を引いて山城国愛宕郡三井神社、大和国宇陀郡御井神社、美濃国多芸郡御井神社、但馬国氣多郡御井神社、出雲国鳴根郡御井神社、同出雲郡御井神社などがある。同神祇部臨時祭式には鎮水祭、御龜神祭、御井祭、御川水祭などがある。大和国の社寺でも多くの例を挙げて、また清泉と貴族の住居、別業、それらの施設院に関しては学報第13回森蘿「寝殿造系庭園の立地的考察」に数多くの実例を挙げて、参考されたい。

（3）

写真で見る通り壁面の上方は菱格子になつてゐるが裏から板が打ちつけである。

（4） 園城寺金堂擬宝珠に「慶長四年十二月吉辰」とある。また慶長内裡中元和4年頃建立の權大納言局宸殿が正保4年に円満院門跡に移建されている。ほとんど時を同じくして慶長内裡中の御車寄がここに移される可能性もなしとしない。